



Title	高校三者協議会実践の意義と可能性（その2）：富良野高校、美瑛高校の事例調査を通じて
Author(s)	横井, 敏郎; 安宅, 仁人; 篠原, 岳司; 月居, 由香; 加我, 拓也; 谷川, 加奈; 寺田, 祐一; 二坂, 芳; 根深, 忠太; 堀内, 礼佳
Citation	公教育システム研究, 6, 1-31
Issue Date	2007-02
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/20516
Type	bulletin (article)
File Information	01-.PDF



[Instructions for use](#)

高校三者協議会実践の意義と可能性（その2）

—— 富良野高校、美瑛高校の事例調査を通じて ——

横井 敏郎¹⁾・安宅 仁人²⁾・篠原 岳司³⁾・月居 由香⁴⁾・

加我 拓也・谷川 加奈・寺田 祐一・二坂 芳・根深 忠太・堀内 礼佳⁵⁾

目次

序章 調査課題と概要	篠原 岳司
1. 調査の経緯	
2. 調査の概要	
第一章 富良野高校三者協議会の事例研究	
1. 学校と地域の概要	篠原 岳司
(1) 富良野市の概要	
(2) 富良野高校の概要	
2. 富良野高校 PST 懇談会の発足と協議経過	堀内 礼佳
(1) PST 懇談会の設置の経緯	
(2) PST 懇談会の協議経過	
<表> 富良野高校 PST 懇談会の発足と協議経過	
3. 第5回 PST 懇談会（2006年度）の実施状況	
(1) 第5回 PST 懇談会（2006年11月17日開催）観察記録	寺田 祐一
(2) 学校側のとらえ方	二坂 芳
(3) 保護者・生徒アンケートによる PST 懇談会の評価	谷川 加奈
(4) 教師アンケートによる PST 懇談会の評価	加我 拓也
(5) アンケート総括	加我 拓也
4. 富良野高校 PST 懇談会の特徴と意義、そして課題	篠原 岳司
第二章 美瑛高校三者協議会の事例研究	
1. 美瑛高等学校の概要	月居 由香
2. 美瑛高校「美高フォーラム」の再編	安宅 仁人
3. 2006年度「美高フォーラム」の実施状況	
(1) 第7回美高フォーラム兼第1回美瑛高校<三者>学校づくり委員会を觀察して	根深 忠太
(2) 第8回美高フォーラム観察記録	横井 敏郎
4. まとめ——「美高フォーラム」の発展をどう見るか？	安宅 仁人
終章 三者協議会実践の意義と可能性	篠原 岳司

キーワード：高校、三者協議会、フォーラム、学校参加、当事者意識

¹⁾ 北海道大学大学院教育学研究科助教授

²⁾ 北海道大学大学院教育学研究科博士課程3年生

³⁾ 北海道大学大学院教育学研究科博士課程1年生

⁴⁾ 北海道大学大学院教育学研究科修士課程2年生

⁵⁾ 北海道大学教育学部3年生

序章 調査課題と概要

1. 調査の経緯

本調査報告は、2005年度調査（横井他「高校三者協議会実践の意義と可能性 ―北海道の2つの高校の事例調査を通して―」『公教育システム研究』第5号、2006年2月。）に引き続き、更なる実証的調査によって高校三者協議会実践の意義と可能性を追究するものである。本稿でいう三者協議会とは、三者懇談会やフォーラム等の様々な名称を持ち、児童・生徒、保護者、教師、さらには地域住民を加えた三者ないし四者による対話の場、および組織のことを表している。

私たちの調査課題は、2005年度調査同様に、三者協議会が果す学校の民主的決定システム、および子どもたちの市民性形成の機能に注目しながら、三者協議会の取り組み実態および発展性を丁寧に描き出すことである。

近年のわが国における教育の分権化は、自律的学校運営への取り組みを加速化させ、個々に取り込まれるその自律性の中身を大きく問うようになってきていた。しかしながら2006年は、いじめ問題への対応のまずさによって学校および地方教育行政の教育運営機能が広く疑問視された年でもあった。それに伴い、官邸主導による教育改革の動きはその批判を取り込む中で勢いを増し、教育委員会、学校、そして教師を改革の「対象」とする政策が企図され、その議論が加速化する現状にあると言える。

しかし私たちは、そのような官邸主導および政治主導による教育改革動向が、中央集権的教育管理へのシフトの兆しを見せていることから、学校と教育行政に対する当事者たちの声を直接的に受け止めるかについて懐疑的である。各地における自律的学校運営を目指した取り組みが衰退せぬよう、当事者参加に基づく学校での民主的協議の実現と、学校における自律的意思決定への取り組みに、引き続き意義を確認したいと考えている。

そこで私たち調査グループは、2005年度調査における成果をさらに深めるべく、引き続き2006年度も調査を行うこととした。三者協議会実践による当事者参加と対話に基づく民主的な学校づくりの推進から、そして自律的な改革「主体」として奮闘する学校の姿から、教育の当事者たちが織り成す豊かな教育の可能性を改めて描き出していきたい。

2. 調査の対象と概要

2006年度の調査対象は、北海道富良野高校と北海道美瑛高校の2校である。

富良野高校では、2005年度に私たちも調査した白老東高校の実践を教員と保護者たちが学び、2003年より三者協議会の取り組みが始まっている。本稿では、保護者の関与が積極的なタイプと言われている同校の実践を検討していくこととした。

美瑛高校「美高フォーラム」の実践は、2005年度からの継続調査となる。昨年度のまとめにより、「美高フォーラム」は四者が相互に影響し合い討議し合う場から、学校づくりや学校改善を志向する場に転換する過程にあることが明らかにされた。2006年度調査では、その再編過程を整理する中で、四者間で共同的な学校づくりを



高校三者協議会実践の意義と可能性（その2）

目指す新たな取り組みに着目し、その意義と可能性を考察していきたい。

調査の経過は以下の通りである（すべて2006年に実施）

- 6月1日 北海道富良野高校校長 中川和憲氏インタビュー
北海道富良野高校教頭 澤口文裕氏インタビュー
北海道富良野高校教諭 松代峰明氏インタビュー
- 6月22日 北海道美瑛高校校長 奥山清氏インタビュー
北海道美瑛高校「第7回美高フォーラム」兼「第1回美瑛高校〈四者〉
学校づくり委員会」視察・参加
- 11月17日 北海道富良野高校「第5回PST懇談会」視察・参加
参加教員・保護者・生徒アンケート
- 11月19日 北海道美瑛高校「第8回美高フォーラム」視察・参加

第一章 富良野高校三者協議会の事例研究

1. 学校と地域の概要

（1）富良野市の概要

富良野市は人口約2万5千人（H18/3）で、上川管内の南、北海道のほぼ中央に位置している。主な産業は観光とワインである。同市は特にラベンダー畑やドラマの撮影地として名を馳せており、毎年の観光客入込数は200万人超、道外からも約70万人が訪れる、北海道を代表する観光地とされている（富良野市公式ホームページより）。一方、行政では「富良野市総合計画」（平成13年度～22年度）という長期計画が策定されている。それに基づき近年の富良野市は、「協働・感動・生き生きふらの」をスローガンに、快適な環境と想像性豊かな人を育む産業の基盤づくりが目指されている。

（2）富良野高校の概要

本章でとりあげる富良野高校は、大正15年に町立の女学校として開校した歴史と伝統を誇る学校である。同校はその間、定時制農業科や商業科等の専門学科が設置されてきたが、平成13年に商業科が富良野緑峰高校に統合されたのを機に、普通科単置校として再発足をしている。平成18年度では学級数が5、581名の生徒が主に市内および近隣町村から通い、教職員は46名で構成されている。生徒の進路状況は、8割が進学、2割が就職である。進学希望者は地元を出て行くケースがほとんどであるが、就職希望者の多くは地元へ残り就職している。

富良野高校の教育の特徴は、地元からの進学等の期待に応えながらも、部活動や委員会活動等、自由な校風のもとで生徒が主役になれる学校づくりが推進されることである。部活動への加入率が8割を超えて大変盛んである他、自主自立の育成を目指した年2回のリーダー研修が催され、生徒たちを中心に各委員会活動とボランティア活動等の充実が目指されている。また、教職員と生徒会の協議によって平成9年度に同校の制服は自由化され、平成15年度に発足した「PST懇談会」は、親や教職員が生徒の意見を幅広く聞き、ざっくばらんに互いの意見を交換し合う機会として継続している。

2. 富良野高校PST懇談会の発足と協議経過

富良野高校PST協議会の発足において中心的な役割を果たした松代教諭へのインタビュ

ューと、「開かれた学校づくり全国交流会 in 大阪」の第2分科会で松代教諭が使用した資料『富良野高校 PST 懇談会の取り組み』、及び「みんなで21世紀の未来を開く教育のつどい—教育研究全国集会 2005」の第20分科会で松代教諭が使用した資料『生徒・父母の願いにこたえる学校をめざして～PST 懇談会のとりくみ～』にもとづいて、その発足と発足後の協議の経過をまとめ、最後に簡単な意見と感想を述べたい。

(1) PST 懇談会の設置の経緯

富良野高校は PST 懇談会ができる前から、開かれた話し合いによって物事を決めていく経験を持っていた。一つは1991年から始まった制服自由化の取り組みであり、規約検討委員会の中で三者が話し合い、97年に制服自由化宣言をするに至った。もう一つは高校統廃合期に新しく普通科単置校となるにあたって、97年に学校教育目標を見直したことである。そこでは教師だけではなく、生徒、保護者、地域住民、中学校の教師などの意見を取り入れて新しい学校教育目標を作っていた。

PST 懇談会を作るに当たって教師側の中心人物であった松代教諭は、富良野高校に赴任する前に北海道高教組の専従役員をしていた時に、辰野高校の三者協議会を知り、実際に辰野高校の宮下教諭を招いて学習会を開いた経験を持っていた。そして、「職員会議の補助機関化」「学校評議員の導入」という流れの中ではみんなで物事を決めるシステムと、「学校の主人公は子どもたち」という理念を実践的に保障するシステムが必要だと考え、三者協議会のような取り組みは今後大切になってくると考えていた。

そこで、富良野高校に赴任した2001年、1学年の担任になった松代教諭は「まずは教師が親と近づく」ことを目的に、夏休みに1年生の保護者と教師の懇親会を開いた。ここでは特にテーマを定めず何か困っていることを出し合う形式で行われたが、この時の保護者からの評判は良く、後には全ての学年で行われるようになった。2002年の12月には、この懇親会の材料にしようとして富良野高生意識アンケートを行った。富良野高校の自由な校風や、授業についての生徒の意見をまとめ、その結果はPTA便りに掲載されて全保護者に配布された。

具体的に三者協議会へ向けて動き出したきっかけは、2002年の4月にPTA総会終了後の時間を使って、三者協議会についての学習会を開いたことである。この学習会は松代教諭を含めた3人の教師たちと2人のPTA役員が呼びかけ人となって、既に「三者懇談会(当時)」を行っていた白老東高校の飯塚教諭を招いて行われたものである。当日は保護者12名、教職員22名が参加し、飯塚教諭の講演の後に懇談が行われた。これをきっかけにPTAが三者協議会に興味を持ち、白老東高校に見学に行きたいという意見が出された。この年には実現しなかったものの、翌年の6月に保護者9名と教員3名で実際に白老東高の三者懇談会を見学に行き、保護者からは「富良野高校でもできると実感した」という声が上がった。

そこからPTAの育成委員会、生徒会、教職員が、富良野高校版三者協議会であるPST懇談会の実施に向けて動き出した。PSTという名称は、親(Parents)と教師(Teachers)が両側から生徒(Students)の育成を支える意味で、Sを真ん中に置きたいという理由からつけられている。

（2）PST 懇談会の協議経過

①参加者構成

生徒の参加は自由任意とはなっているが、生徒会執行部の生徒と HR 委員会の生徒、テーマによっては校風委員会の生徒は半強制的に参加することになっている。それ以外の生徒が個人的関心で集まることは少ないが、第 2 回の PST 懇談会を「授業」をテーマに行ったときには 60 人もの生徒が集まり、関心の高さを見せた。

保護者には PST 懇談会の案内状を出す、それだけではあまり人が集まらない。PTA には育成委員会のほかにも総務委員会と学年委員会があるが、その理事などに育成委員会の役員が個別に電話をして呼びかけを行い、参加者を増やす努力をしている。

教職員の参加も自由である。生徒指導部の教師は特に用事がない限りは参加している。それ以外の教師たちも PST の意義を認めて時間があれば参加したいと考えている。ただ、富良野高校の特徴の一つに部活動の加入率の高さがあり（約 80% 超）、生徒と教師が PST 懇談会に参加しづらくなっている原因の一つと考えられる。

また、地域住民や同窓生の参加は現実的には進んでいないが、2005 年の第 4 回 PST 懇談会では学校評議員 5 人が視察している。この 5 人は地域のいろいろな団体の代表者であり、同窓生も含まれている。

②テーマの変遷、議論の状況

第 1 回 PST 懇談会（2003 年 11 月 21 日）のテーマは、育成委員会の話し合いの中で、PTA が服装について、教師が授業についてやりたいという案を出したことから、「服装の自由化をどう思うか」と「授業について」の 2 本立てとなった。当日は生徒 20 名、保護者 9 名、教師 10 名が参加し、司会は教師が勤めた。「服装」については保護者や教師側から「自由の中にも自主規制は大切」、「節度ある服装が望ましい」などの意見が出た一方、生徒からは「高校の 3 年間ぐらいいは自由になりたい」、「今のままでいいとは思わない」、「心にゆとりができるので私服や自由は良い」、「私服は面倒、制服のほうが良い」など様々な意見が出た。服装についての論議が長引き、「授業」については、生徒側と教師側の意見を出し合っただけで時間切れとなってしまった。

第 2 回 PST 懇談会（2004 年 7 月 21 日）の開催にあたっては、事前に三者代表者会議を開いて、①「三者が本音で語れるように、何をテーマにして、誰に参加してもらうか」、②「参加者だけではなく、生徒、保護者、教師全体のものにしていくためにどうするか」について話し合った。その結果、前回話し合いが十分にできなかった「授業～より良い授業を目指して～」をテーマにすること、参加者を限定せずなるべく多くの人に参加してもらうこと、司会は教師と生徒で行うことなどを決めた。また、事前に生徒を対象とした授業についてのアンケートも行った。PST 懇談会当日は、授業を保護者に公開したこともあってか、生徒 60 名、保護者 30 名、教師 30 名の計 120 名という大人数になり、学年ごとのグループに分かれて話し合うという形式で行われた。「授業」というテーマのせい、生徒からは授業についての不満、要望が数多く出たのに対し、教師は防戦一方で、保護者は意見が出しづらかったといった状況だった。参加した生徒の中には、PST 懇談会で話し合うことで次の日から授業が変わると思っていた者もいて、「先生の参加が少ない」、「ただ意見を交換しただけだった」などの不満も見られたが、予定していた 2 時間半が足りなくなるほどの熱い議論が行われた。

第3回 PST 懇談会（2004年11月19日）のテーマは「すばらしい行事を作ろう～学校祭を中心に～」であった。これは生徒側からの要望から出て、育成委員会で決定したテーマである。当日の参加者は生徒40名、保護者12名、教師15名であった。事前に行ったアンケートにおいて学校祭で後夜祭をやりたいという要望が出されたため、それが議論の中心になった。

2005年度は富良野高校80周年だったために、PST 懇談会の7月開催はできず11月開催のみとなった。第4回 PST 懇談会（11月15日）のテーマは三者の代表で話し合い、保護者の提案から「僕らの願い～学校・仲間・親のこと～」に決定した。参加人数は第3回とほぼ同様だが、過去3回に比べると保護者の数が一番多くなった。お互いに思っていることを自由に言い合うという形で行われたが、教師の発言に対して保護者が生徒を擁護するような発言も見られた。

③実現したもの

他校の三者協議会の実践と比較すると、富良野高校の生徒は学校に対して「もっとこういう風に変えてくれ」などの要求が少ないようだ。また、テーマも「〇〇の是非を問う」のように具体的なものではなく、大まかなテーマを定めているためか、これまで PST 懇談会によって実現した物事というのは少ない。一つは第3回 PST 懇談会で行事について話し合ったときにある生徒が出した「雪中スポーツ大会のときに豚汁を作って食べさせてほしい」という要望が、PTAのほうで話し合ったうえで実現した。予算については生徒会のほうで考え、親は献立を考えたり、鍋を用意したりするという形で準備を進めた。ちなみに、同じく第3回 PST 懇談会で出た後夜祭の件は、職員会議で検討することになったが、生徒会のほうでその案を断念してしまって、実現には至らなかった。

もう一つ、PSTの成果として挙げられるのは、2005年の5月に「定期考査に関する要望書」がHR委員会から学校長宛に出されたことである。これはPSTで「授業」をテーマに話し合ったときにも出た、「定期考査の範囲を2週間前に発表すること」、「試験範囲は余裕を持って授業を進められる範囲にすること」、「重要なポイントを先生同士で互いに確認すること」を要求するもので、PSTを通して生徒の中に「意見があったら言ってもいいんだな」という気持ちが芽生えた結果、出てきたものだと思う。

（3）小括

富良野高校のPST 懇談会の特徴の一つに、主催しているのがPTAの育成委員会だという点がある。松代教諭の話だと、事務局は一応教師側ということになっているらしいが、教師側の役割は「育成委員会を開こうよ」ということや保護者向けの案内文書の作成などであり、育成委員会側は会場の準備やおやつのお買出しなどを行っている。三者が参加するきちんとした事務局が今後できれば、テーマの設定や、実施までの役割分担などがスムーズに行えるのではないだろうか。

PTA主催ということもあってか、保護者側はPSTに積極的な態度で臨んでいるような印象を受けた。参加している保護者はまだ一部にとどまっているかもしれないが、参加者を増やす努力や3、4回目のPSTからは事前に育成委員会で「こういう発言をしよう」などと話し合っていることなどは評価できると思う。

もう一つの特徴はテーマの抽象性である。「何かの是非を問う」ようなテーマではないことが、PST 懇談会での話し合いを通じて「学校を変える」ことを難しくしているという

高校三者協議会実践の意義と可能性（その2）

ことを短所として挙げることも可能であろう。富良野高生の特徴として、「学校のここを変えたい」という要望があまり見られないこともあるだろうが、この PST 懇談会の目的が、三者の話し合いのもとで学校を変革していくことなのか、それとも生徒の発言する力を伸ばすことなのかが分かりにくいと感じられた。

<表> 富良野高校 PST 懇談会の発足と協議経過

<PST 発足まで>			
日付	出来事	参加者	備考
2001. 7	1 学年父母懇親会	保護者：35 名	
2002. 4	三者懇談会についての学習会（PTA 総会終了後）	保護者：12 名	飯塚教諭の講演後、懇談
		教職員：22 名	
		白老東高校から 飯塚教諭	
2002. 12	富良野高生意識アンケート	全校生徒対象	総務部が実施
2003. 6	白老東高校三者懇談会の見学	保護者：9 名	
		教員：3 名	
<PST 発足後>			
日付	出来事	参加者	テーマ
2003. 11	第 1 回 PST 懇談会	生徒：20 名	「制服の自由化をどう思うか」 「授業について」
		保護者：9 名	
		教師：10 名	
2004. 7	第 2 回 PST 懇談会	生徒：60 名	「授業～より良い授業を目指して～」
		保護者：30 名	
		教師：30 名	
2004. 11	第 3 回 PST 懇談会	生徒：40 名	「すばらしい行事をつくろう～学校祭を中心に～」
		保護者：12 名	
		教師：15 名	
2005. 5	「定期考査に関する要望書」の提出	HR 委員会から	
		学校長宛	
2005. 11	第 4 回 PST 懇談会		「僕らの願い～学校・仲間・親のこと～」
2006. 11	第 5 回 PST 懇談会	生徒：41 名 保護者：20 名 教師：20 名 他	「どういった学校がのぞましいか」

しかし、テーマを限定しないという面では幅広い議論を行えるため、それを長所ととらえることもできる。また、第 2 回 PST 懇談会で授業について話し合ったことが、何かを解決する議論ではなかったにしろ、生徒が授業やテストについて考えるきっかけとなり、「定期に関する要望書」を出すに至ったことに注目したい。抽象的なテーマ設定によって幅広い意見交換が生み出されるため、生徒や学校そのものに及ぼす影響は必ずしも小さく

ないと言えるだろう。

3. 第5回 PST 懇談会（2006年度）の実施状況

（1）第5回 PST 懇談会（2006年11月17日開催）観察記録

①参加状況と議題

富良野高校第5回 PST 懇談会は、2006年11月17日の放課後 16:00~18:00 の時間帯で開催された。懇談会の参加者は生徒41名(生徒会執行部、各クラスから校風員・HR委員、残りは自由参加)、教師20名、保護者20名、学校評議委員4名で、加えて見学者として上富良野高校PTAが3名、そして北大12名であった。司会は生徒、教員、保護者から1名ずつが代表して執り行い、会場は生徒と保護者、司会と教職員・傍聴者が椅子に座り向かい合う形であった。

第5回懇談会の議題は、「どういった学校がのぞましいか」である。いじめ問題等、責任や批判の矛先が教師や学校ばかりに向くことも多いなか、富良野高校 PST 懇談会では、生徒、保護者、教師が本音で語り合い、三者が互いに支え合うことでよりよい富良野高校を作っていくというコンセプトが初めに確認された。

②PST 懇談会の様子

第5回の議題が「どういった学校がのぞましいか」という大きなテーマであったため、最初の30分は教師2名(坂口教諭、西村教諭)、保護者2名(目黒育成委員長、里崎PTA会長)、生徒2名(村上さん、林さん)が全員の前に出て、それぞれの立場から今思うことについて述べた。そして参加者全員がそれを受け、残り時間で議論を展開させていった。大きなテーマということもありなかなか議論の焦点が定まらず、具体的な結論を時間内に導き出すことは難しかったが、参加者からは数多くの前向きな意見も出された。出された問題をこれからの学校改善に少しでも活かしていこうという三者の合意が交わされ、明るい雰囲気のもとで懇談会は散会した。

議論の中身をもう少し具体的に見ていく。第5回 PST 懇談会では「生徒が自由をどう捉えているのか」という点に多くの論点が集まった。生活面に関しては、教師から「確かに服装は自由だが、今の生徒はその自由をはき違えている。外部の人からも見られているのだから、もう少し自由というものを律していくべきではないか」という意見が出された。対する生徒側からは、「確かに服装を律していくことも必要だと思う」という教師側の意見に一定の理解を示す意見が出されたが、ではその為にどうするかという具体的な中身まで議論するには至らなかった。

学習面では、大学受験を控えた生徒から「授業中、休み時間中の私語がうるさくて勉強に集中できない」という意見が出されたが、別の生徒からは「授業中はともかく、休み時間をどう使おうが勝手だ」という意見も出され、生徒間に対立が見られるシーンがあった。これを受けて教師側からは、「もし、勉強している人がいたら少し声のトーンを下げるとか、周りに気を配れるような学校こそ真に望ましい学校ではないか」という声が上がった。この時の生徒たちの中には、この教師の意見に頷く姿が見られていた。また、保護者からは、「勉強だけが学校ではない。周りとの協調性など勉強以外のことでも成長して欲しい」、「集団の中で協調していくことはこの先社会に出る時にも必要だ」といった意見が重ねて出された。最終的には、会場の雰囲気が1つにまとまりつつある様子が見られた。

③ PST 懇談会の感想

PST 懇談会では生徒が論理的に発言している印象を受けた。これは懇談会を重ねるごとに、生徒が自分の意見を主張する力をつけている証拠ではないか。論理的な意見を主張する力は、普段の学校生活や教科学習だけで養えるものではなく、この点で三者の PST 懇談会は、生徒の成長という面で大きな役割を果たしていると考えられる。また、富良野高校 PST 懇談会は、保護者の参加が多いことに特色がある。これは他の三者協議会実践校が保護者の参加の少なさに悩む現状があるのに比べ非常に良い特徴と言える。保護者参加の充実が、学校側にとって保護者の生の声を数多く聞けるメリットがあり、相互理解を促す効果も期待される。その点も考慮すると、富良野高校 PST 懇談会の取り組みは、積極的な学校改善への可能性を秘めていると言えるだろう。

一方、改善点も数点あげられる。まず、第 5 回 PST 懇談会は議題がやや大きかったため、意見を出しづらそうにしている参加者が多く、議論が噛み合うまでに少し時間がかかっていた。大きなテーマの中にあっても、学習面からの議論、生活面からの議論など小テーマをいくつか設定して議論できればもう少し活発な意見交換ができたのではないだろうか。また、発言者が一部に限られているというのも課題である。特に生徒の中では、下級生が上級生に遠慮してほとんど意見を出せなかったように見受けられた。短い懇談会の時間内に全ての人が発言するのは物理的に無理であるが、参加者が事前の協議などを通して自分の意見を出す機会を十分に持つ必要があるのではないだろうか。

現状では三者それぞれの立場から役職に就いている人が参加しているため、参加者がやや固定化される傾向にある。それぞれの立場で自主的な参加者を増やしていく努力が重要である。自発的な自由参加者の存在は議論をより活発にする要素と言えよう。

④ 小括

富良野高校 PST 懇談会は、三者が率直な意見を出し合い、三者協力のもとよりよい学校を考える場として有意義なものである。懇談会の中で出される一人一人の貴重な意見を今後の学校のあり方に反映させていくには、事後の取り組みが重要になってくる。生徒、教師、保護者がそれぞれ議論を持ち帰り、議論をより深めることができればいいが、日常の忙しさもあり現在ではそれが十分にできているとは言えない状況である。これは他の高校の三者協議会と同様に、富良野高校 PST 懇談会の課題でもある。

（2）学校側のとらえ方——管理職インタビュー（一部松任教諭インタビュー）から

ここでは、富良野高校 PST 懇談会における意義と成果、そして今後の課題について、学校側の見解を中川校長と澤口教頭、そして一部松任教諭の語りをもとに整理する。

① 意義

まず、PST 懇談会の意義は、多くの教師が様々な生徒の意見を聞くことで、こういう意見を持っているんだと生徒の考えに気づく機会になっていることである。保護者の立場からも同様に、多くの生徒を介して意見を聞くことで今の子どもたちが何を考えているのか、学校をどう思っているのか、親に対してどう思っているのかという、お互いの本心に素直な気持ちを聞き取る場面になっているようである。また、「富良野高校の三者協議会は教師側からお世話をするのではなく、あくまでも P（親）の主催行事の一つということに意義がある」（澤口教頭）というように、学校側は PST 懇談会が親中心で組織されているこ

とを重要な特色と認めている。

②成果

次に成果として挙げられたことは、三者の意識改革、生徒の成長、親の学校に対する関心が増えてきたことである。具体的に澤口教頭は、「生徒はどう思っているのかだとか、親はどのような風なものを学校や生徒に期待しているのか、また教師側も親や生徒に何を期待しているのかというようなことをざっくばらんに言える」、「お互いの考えていることを聞いて、親が、いろんな意識を変えることにもなっているのかな。意識改革にもかなりつながっているところがあるんじゃないですかね」と述べている。自分の思うことを素直に言い合うことで三者それぞれの意識が変わっていく様子が認められるようである。

また、生徒の成長については、生徒たちが PST 懇談会によって議論の大切さを学び取っていることが挙げられている。そしてそれが、生徒たちのホームルーム討議にも反映されているようである。ホームルームではクラスの議長を中心に生徒の様々な意見が出され、そこから吸い上げられた意見が生徒会に持ちだされ意見集約される。そして、生徒会で作られた原案が再びホームルームへ戻され議論されているという。また、PST 懇談会参加者の間でも PST 懇談会が生徒の成長の場を担っている共通認識が見られるようである。生徒自身もまたそういう議論の過程を経て物事が作られるという意識を持てるようになってきているということであった。

親の学校に対する関心も増している。親たちは PST 懇談会に関わることで、その会議だけではなくそれを準備する段階でも学校に足を運ぶようになってきている。それにより、生徒の代表や教師と会話をすることが少しずつ多くなってきているらしい。この意味で保護者にも学校に関心を持ってもらうという成果が見られている。

さらに、地域の人たちに対する成果も挙げられた。富良野高校には学校評議委員会（委員5名）がある。ここでは PST 懇談会のテーマ設定アドバイザーとして同窓生や地域住民を巻き込んだ討論会などが開かれ、今後の取り組みへの意見集約がなされ、会議の改善につながる場面があったという。このような形で、地域の方にも PST 懇談会の活動を知ってもらえる機会があることは、学校と地域の相互理解を深める上での成果と言える。

③課題

学校側から出された課題は、まず、生徒、保護者、教師ともに限られた人たちの会になってしまっており、任意的に集まる人が少ないという現状をどのように改善していけるかという問題である。特に生徒には、様々な会に自分から「参加しよう」という意識づけが必要と指摘されている。そのことを通じ、PST 懇談会も生徒に呼びかけて集まれるようにすることを目標としている。

また、時間と場所、開催頻度の問題も挙げられる。現在は保護者主催の行事として、年2回実施したいという要望で設定しているが、同日程で PST 懇談会をやりながら部活動も、講習もやらざるを得ない状況になっている。できる限り PST 懇談会だけをその日の行事として設定するようしていきたいということであった。

中身の問題としては、もっと生徒を通じて案内を広め、一般の生徒も参加できるようなスタイルにすることや、会議慣れしていない保護者や生徒がもっと意見を出しやすい場面作りをすることなどが挙げられた。

また、引継ぎの問題もある。「生徒は毎年変わっていきますし、親も変わっていきます。

高校三者協議会実践の意義と可能性（その2）

われわれ教員はどちらかというと、10年くらいこの学校にいますから、少しずつの違いだとか、中身を理解してやりますけれども、そのサイクルごとに代わっていく生徒側に、どういう風に伝統を伝えていくかだとか、中身の維持だとか、よさを伝えるというのが難しいかなとは思いますがね」（澤口教頭）とあるように、次々と入れ替わる生徒や親にどのように PST 懇談会を引き継いでもらえるかが課題とされる。そのためには、きちんと引継ぎができるシステム作りと同時に、PST 懇談会は大事なものだという理解者を増やしていくことが必要ということであった。

全体を通しての生徒側の課題は、PST 懇談会を中心的に担う松代教諭も述べるように、自分たちでやるところはやる、あるいは変えてほしいところは要求していくといったような自治の力を日常的につけていくことである。教師側には、なぜ PST 懇談会が必要なかを改めて勉強する機会を皆で作る意識が求められるという。また、地域の人たちの意見や考え方を大事にすべきだという視点に立ち、地域の代表者にも PST 懇談会に参加してもらうことが挙げられる。この場合、少しでも学校に関わりを持つ人々に、責任を持って参加してもらうスタイルが考えられている。学校側は、ゆくゆくは四者で様々なことを考えていけたらという思いを持っているようである。

④小括

富良野高校の管理職および松代教諭は、PST 懇談会の成果を強く実感しているようである。中でも保護者や生徒の変化を特に高く評価している。保護者が学校や生徒に何を期待するのか、生徒が保護者や学校に何を求めるのかがわかるようになったことが大きな成果であるようだ。また、生徒が自分の親だけではなく、他の保護者の本音を聞いてみることで、自分たちの生活などを見直すことにつながっていることも学校側は高く評価している。課題はあげられるものの、PST 懇談会の意義や成果はしっかり認められており、学校側はこれを今後も発展させたいと考えている。

共働きの親が増え、それとともに親の学校不参加、無関心などが多くなってきた今、三者懇談会という形で自分の子どもが通う学校により興味を持ってもらえるようになったことがとても良い効果だと言える。また、自分の感じることや要望を発言する機会が設けられたことで、生徒の中にも学校を良くしていこうという意識がどんどん芽生えていくことが期待できる。そのためにも、課題の部分でも述べられていたように、三者懇談会の設定条件等を変え、できるだけ多くの先生や生徒、親が参加できるようにすることが大事になってくるだろう。

（3）保護者・生徒アンケートによる PST 懇談会の評価

①保護者による評価

2006年11月の第5回 PST 懇談会終了後、保護者10名に対して、富良野高校 PST 懇談会についてどのような受け止め方をしているかについてアンケート調査を行った。サンプル数は少ないが、その結果をもとに保護者が PST 懇談会をどう見ているかについて考察を加える。

i) 保護者への認知度

- ・「PST 懇談会の存在は保護者に十分に知られていると思いますか？」

「思わない」「あまり知られていない」といった否定的な回答が殆どだった。

- ・「保護者の意見はどのようにまとめているのですか？」
意見の集約に際し、実際は PTA の育成委員十数名で事前会議を 2・3 回開いているが(2006 年 6 月松代教諭ヒアリングより：以下略)、育成委員会または役員という回答は少数で、無回答や分からないという回答が約半数を占め、集約方法を把握している保護者は少ないようである。

- ・「PST 懇談会で話し合われたことは参加しなかった人にも伝わっていますか？ 保護者の学校への関心が深まったと思いますか？」

話し合ったことについては PTA 便りで知らせてはいるが(ヒアリングより)、「伝わっていない」という回答が殆どであった。しかし、関心が深まったかについては、ほぼすべての保護者が「深まった」と答えており、「参加したことにより関心が深まるので参加者を増やすべきだ」という意見も見られた。

保護者の認識度は高くはなく、発行されている案内文書や PTA 便りの効果も高いとは言えない。しかし、実際に参加した保護者は、参加することにより関心が深まると考えており、開催結果の情報伝達、関心ともに広まることを期待する意見も出されている。

ii) PST 懇談会の議論

- ・「保護者の意見・要求は学校に受け入れられている(理解されている)と思いますか？」
大別して、肯定 3 名、否定 3 名、分からない(無回答含む)4 名であった。「まずは話すことが重要」という回答があった。

- ・「PST 懇談会での生徒たちの主張はきちんと提案されていると思いますか？」
生徒の主張に関し「一部できている」も含め「できている」と答えた保護者は約半数であったが、同時に「的を射なくとも発言し、主張できる子どもであってほしい」など生徒の発言の少なさについての指摘が数多く見られた。

議論の効果や生徒の主張の出来についての評価は分かれたが、発言することの意義を重視する保護者が多数いた。

iii) PST 懇談会による生徒・保護者の変化

- ・「PST 懇談会がきっかけで、子どもさんと学校のことを話すことはありますか？」
「ある」と言う保護者が 5 名、「今まではなかったが今回を機に話をしたい」と答えた保護者が 2 名だった。この 2 名の意見の他に、「ある」と答えた保護者の「アンケート結果をもとに、気になることを質問したりします」という回答からも、具体的な生徒の実態や要望を実際に見聞きすることによって関心を持ち、子どもとの会話につながっていると考えられる。
- ・「PST 懇談会は生徒の日常の行動や姿勢などにより影響を与えていると思いますか？ それは具体的にどんなところですか？」

約半数が無回答だった。「ある」と答えた保護者の回答としては、生徒への影響の具体例と言うよりは、生徒が PST 懇談会で発言したり考えることの意義や、開催意義についての意見が多かった。

保護者の回答からか、生徒の変化よりも保護者の変化についての言及の方が多かった。PST 懇談会が子どもと話すきっかけとなるという意見は多く、保護者の学校・生徒への関心を高める効果が認められる。

iv) PST 懇談会の意義

- ・「PST 協議会は有意義だと思いますか？」 「はい」8名、「いいえ」2名
- ・「今後も継続してほしいですか？」 「はい」10名
- ・「PST 協議会を今後進めていくにあたってどこか改善した方がよい部分がありますか？」

活発な議論を行えるようにするための工夫を求める声が複数あった(テーマの決め方、全体の他に学年に分かれての話し合いなど)。他にも伝達方法の工夫や、理解を広める必要を唱える意見が見られた。

回答をしたほぼすべての保護者が、PST 懇談会を有意義と考え継続に賛成している。また、PST 懇談会をより良くするための問題意識を持った保護者も多い。

保護者による評価をまとめると、PST 懇談会への保護者の認知度は低いですが、少なくとも参加した保護者は参加することにより学校・生徒への関心が高まり有意義であると考えている。また、参加した保護者は PST 懇談会について、保護者・生徒が発言し考えることに意義があるとし、より議論が活発になる工夫を求めていることが明らかにされた。

②生徒による評価

生徒へのアンケートもまた、同日の PST 懇談会に参加した生徒 41 名から記述回答を得た。

i) 生徒の参加・関心

- ・「事前の生徒会討議(あるいはクラス討議)にはみな積極的に参加していますか。」
大別して「クラス討議がなかった」8名、「積極的に参加していない」15名、「一部している人もいる」4名、「だいたい」5名、「している」4名、無回答(「わからない」含む)4名であった。この数字は、クラス討議は基本的に行われておらず、生徒会の討議に一部の生徒が参加していると読み取ることができる。
- ・「PST 懇談会に生徒はみな関心を持っていますか？」
「持っている」5人に対し、「持っていない」10人、「あまり持っていない」23人だった。

結果を見る限りでは、PST 懇談会に対してすべての生徒が関心を持っているとは言えない状態であり、同様にクラス討議に積極的に参加している生徒も少ないようである。

ii) PST 懇談会による変化

- ・「生徒の意見は教師・学校や父母に受け入れられている(理解されている)と思いますか?(生徒の要求が実際に実現したことはありますか?)」
大別して「はい」18人、「いいえ」14人、無回答(「わからない」含む)9人だった。実現の具体例としては、2人の生徒が「豚汁」をあげた。
- ・「PST 懇談会を通じてこんなことを実現したい、ここを変えたいと思ったことはありますか？」
けじめ・自覚・責任：8人、授業(態度・雰囲気など)：6人、他校との交流、先生と父母の交流、クラス・学年・学校の団結、より良い学校に、制服、寒さ対策、意見の言える雰囲気、など。「ない」16人、無回答(「分からない」含む)5人。
- ・「PST 懇談会がきっかけで、父母と学校のことについて話すことがありますか？」

大別して「はい」13人、「いいえ」25人、無回答(「分からない」含む)3人だった。「はい」と答えた生徒でも、PST 懇談会がきっかけで話しているというより普段から話している生徒が多いようなので、「いいえ」が25人だったことも考慮すると、PST 懇談会が学校について話すきっかけとなることはそれほど多くないようである。

回答した生徒の約半数が、生徒の意見は受け入れられている(理解されている)と考えている。また、PST 懇談会によって父母と学校について話す機会が増えるという効果はさほど見られないが、PST 懇談会を通じて学校生活について何らかの問題意識を持ったという生徒は半数以上いた。

iii) PST 懇談会の意義

- ・「PST 懇談会は有意義だと思いますか？」

「思う」と答えた生徒が32人と、参加した生徒の大多数はPST 懇談会を有意義と考えている。具体的な意見としては、「色々な人の意見を聞ける」「ためになる」「生徒・教師・親が話す機会はあまりない」など。しかし、有意義さを認める中にも、発言の少なさや参加生徒が限定されていることへの指摘が見られた。

- ・「今後も継続してほしいですか？」

「ほしい」36人、「いらない」2人、「どちらでもよい」3人だった。

- ・「PST 懇談会を今後進めていくにあたって、どこか改善した方がよい部分がありますか？」

発言の少なさ・意見を出しやすくする工夫：15人、窮屈・暑い・協議前のトイレ休憩：3人、参加者層の工夫(全校生徒の参加・少人数化・色々な立場の人)：3人、テーマを設定すべき：2人、PST 懇談会の時間の延長・短縮、最初の挨拶を討議に回すべき、事前討議など考える時間がほしい、生徒のマナー、「ない」8人、無回答3人

参加した生徒の大半が、PST 懇談会は有意義で継続してほしいと考えている。PST 懇談会の改善点については、議論が活発になるよう工夫を求めるものが一番多かった。

iv) 小括

アンケート結果を見る限りでは、生徒全体のPST 懇談会への関心が高いとは言えない。しかし参加した生徒の約半数はPST 懇談会での自分たちの意見は理解されたと考え、PST 懇談会を通じ自分なりの学校に対する意見・要望を持つ者が多かった。そして参加生徒のほとんどはPST 懇談会を有意義であるとしている。

保護者・生徒両者のアンケート結果について共通して言えることは、全体としての関心は低くとも、参加することによって関心・問題意識を持ちPST 懇談会を有意義だとする参加者が多いことである。保護者は生徒に発言を期待していたが、生徒自身は発言の少なさを実感しているものの実行に至っていない。しかし、参加を通じて自己の学校生活などについて関心を持つとともに、PST 懇談会が生徒の意見を理解してくれている場であるという認識を持つ参加生徒は少なくなかった。議論の活発化などPST 懇談会自体の改良と共に、参加していない生徒・保護者への広報、事後報告、そして事前討議の徹底化により、より多くの生徒・保護者の関心、理解を得られることが期待される。

（4）教師アンケートによる評価

保護者・生徒同様、記述形式の質問紙調査によって、教師 10 名から回答を得ている。これをもとに教師が PST 懇談会どのように見ているかを整理・考察する。

①PST 懇談会に取り組む生徒の状況

教師の多くは、生徒の多くが PST 懇談会について関心を持っていない、関心を持っているのは、生徒会と一部の 3 年生だけとみなしている。むしろ、1 年生は「PST」という用語すら把握していないととらえている。また、ある教師の「話題にあがっている、マイナス要素にかかわるような子は参加しないし、関心もない」という意見のように、本当にわかってほしい層にはわかってもらえない、という認識もあるようである。

なお、PST 懇談会開催に向けて事前にクラス討議などを一般的に行っていないようであるが、生徒側でも意見が分かれているように、教師でも 1 名だけ、「やっている」という回答があった。ここから、個別的にやっているクラスもあることが伺える。しかしその討議の中身について明確なことはわからない。

②PST 懇談会を通じた変化

ここについては「わからない」という意見・無回答が半数、さらに、「変化はないだろう」という意見が多い。上記と同じように、興味のある生徒のみが変わっているのではないか、という意見も見られた。

また、少なからず影響はあるだろうという意見とともに、急激に変わるものではなく、「10 年くらいの長いスパンで変わるもの」「変わる一歩目」になりうるなどの意見も見られた。

③PST 懇談会の意義について

教師からしても、「有意義である」、「続けたほうが良い」、という意見が大半である。今後の継続についても、大半が継続したほうが良いという意見、1 名がわからない、1 名が、「するならしてもよい」というものであった。反対意見は聞かれないことから、教師は PST 懇談会をプラスに評価していると言える。

④PST 懇談会の改善点

「生徒がもっと話しやすくするべきだ」というような意見が大半である。そのための何かしらの工夫が必要であることを教師側は訴えている。また、参加する生徒に代表者意識を持たせるため、「生徒同士の事前の打ち合わせ、話し合いの機会が必要である」という意見も出されている。

また、学校をより良くするための話し合いと考えた時に「外部の人を入れないほうが」という意見もあった。そのことによって、「見栄がはたらく」という理由からである。このことも一理あり、PST 懇談会の参加対象の設定範囲については教師間でも多様な考えがあるようである。

教師の多くは、この PST 懇談会を有意義なものとして捉え、継続したほうが良いと考えている。しかし改善点として、生徒の発言の活発さ、PST 懇談会自体への興味関心など、生徒の自主性の少なさに起因するものを問題として挙げているが、こういった課題があるにもかかわらず、教師たちは全般的に PST 懇談会に今後発展性を感じているようである。

(5) アンケート総括

アンケート結果に見られる保護者、生徒、教師の考えを比較検討する。保護者は、参加することにより学校・生徒への関心が高まり有意義であると考えている。生徒は、PST 懇談会を通じて自分なりの学校に対する意見・要望を持つ者も多くなることから、参加生徒のほとんどは PST 懇談会を有意義であるとしている。それらに対し教師は、有意義であるとしながらも、保護者や生徒のように、具体的に有意義な点についてはほとんど触れてはいない。教師は、生徒や保護者と比べて、よく言えば冷静、悪く言えば冷ややかな目でとらえているのではないだろうか。あるいはもしかすると、教師は PST 懇談会を実施する側であるため、このようなアンケートにおいても抑制的な回答をしている可能性もある。

今後の発展性を考える時に、有意義であり、継続されていくことは三者から望まれている。しかし、議論の活発化など課題が多くあることも三者共通の認識である。発言の活発化などの PST 懇談会自体の改良に加え、参加していない生徒・保護者への広報、事後報告、そして事前討議の徹底化が成されることで、PST 懇談会はさらに発展していくと考えられる。

4. 富良野高校 PST 懇談会の特徴と意義、そして課題

最後に、富良野高校 PST 懇談会の特徴と意義を確認し、今後の可能性を含め課題をまとめていく。

まず、PST 懇談会の特徴として、PST 懇談会が保護者主催によって開かれている点があげられる。この特徴は、PST 懇談会設立の経緯から見られる学校側と PTA との継続的な協力体制に起因し、三者協議会を実践する他校と比して富良野高校特有の実施体制と位置づけることができる。保護者からのバックアップによって三者のバランスの取れた参加が安定して実現することで、PST 懇談会は三者の相互理解を深める重要な役割を果たしているのである。

PST 懇談会の意義として生徒の成長の機会として認識されている点があげられよう。とりわけ学校側は、生徒たちが PST 懇談会を通じ、議論の大切さを学び取っているとの認識を持っている。これは、日常のクラス討議と生徒会活動の様子からも日々感じ取れるという。また、PST 懇談会では自らの意見を論理的に主張する生徒の姿が見られている。そのような力は、日常的な学校生活、あるいは教科学習のみでは簡単に養えないものだろう。生徒たちは PST 懇談会に参加することで、そのような力を自分のものにしてきているようである。このように、PST 懇談会は生徒の成長において好影響をもたらしている。このことは富良野高校が掲げる「自主自立の育成」目標とも結びつく、PST 懇談会の一定の意義と位置づけられるだろう。

一方で課題も見えてきている。1つは、他校の実践と同様に PST 懇談会も参加者が限定されている点である。アンケート調査から明らかなように、三者とも PST 懇談会が全体に認知されているとは理解していない。第5回に限れば、生徒たちの事前討議も各教室で充分に行われていたとは言えず、また PTA 育成委員による事前会議の開催も保護者たちにはそれほど知られていなかったようである。確かに一度参加することで PST 懇談会の意義が実感できるとの声は、特に生徒や保護者から多く出されている。しかし、開催に関

高校三者協議会実践の意義と可能性（その2）

わっての時間と場所、そして頻度の問題もあって、自発的に議論に加わろうとする参加者は増えていないのが現状である。今後は、参加していない三者への広報活動や懇談会報告書の配布、そしてテーマに関する事前・事後討議の機会を充実させるなどの対策を講じ、PST 懇談会の意義について、三者全体からのより広い理解と関心を獲得する取り組みが重要となろう。

また2つ目の課題は、PST 懇談会の目的と展望について多様な考えが存在する点である。PST 懇談会はこれまでに生徒の成長の機会として三者に広く認識されてきた。しかし、教師間では、松代教諭のように地域も含めた四者での懇談会により共同的な学校づくりを展望する教師もいれば、学校改善を目的とするには懇談会の参加対象の設定に慎重になるべきとの意見も出ている。このことから、現在の PST 懇談会は、今後の会議の位置づけについて改めて全体での共有化を目指すべき時にあると言える。具体的には、PST 懇談会を自由な議論を通じた三者ないし四者の相互理解と信頼醸成の機会とするのか、それとも学校づくりに向けた合意形成を目指す協議機関あるいは意思決定機関としての性格を強めていくのか、あるいはその両者を目指し何らかの協議の場の分化を模索するのか、その方向性を確認するプロセスが求められるだろう。この過程を経て、事務局設置の議論や三者の引継ぎの問題に一定の進展が期待できる他、PST 懇談会が目指すところが広く共有化されるため、参加者拡充の取り組みもより効果を上げやすくなると考えられる。

富良野高校には、かつての制服自由化や学校教育目標づくり見られるように、開かれた話し合いによる合意形成の伝統が息づいている。またリーダー研修などの取り組みに代表される自主自立の育成や自由な校風といった教育方針も、学校全体に広く共有された一つの文化となっている。その意味において PST 懇談会は富良野高校に息づく伝統と文化によって支えられ、安定的な取り組みが可能になっている。PST 懇談会は、富良野高校の伝統と文化に根ざした三者懇談会と言えるだろう。今後とも、富良野高校らしい懇談会の追求にむけて安定的な会議の運営と継続を最も期待したい。上に指摘した課題もまた、その伝統と文化の基礎の上に一つ一つ克服されていくべきものだろう。

第二章 美瑛高校四者協議会の事例研究

1. 美瑛高等学校の概要

1948（昭和23）年、北海道永山農業高等学校美瑛分校として認可され、1952（昭和27）年北海道美瑛高等学校として独立した歴史あるこの学校は、全日制普通科・家政科・定時制農業科・定時制生活科等の設置・閉科を経て、2006（平成18）年度（5月1日現在）は、全日制普通科2学級、生徒数130名が通学し、23名の教職員が勤務している。

生徒の出身中学を見ると、美瑛町からの出身者が54名（41.5%）、旭川市からの出身者は71名（54.6%）、その他の出身者は5名（3.9%）である。通学方法も、旭川方面より30分ほどの通学時間ということで、列車通学している生徒が73名と半数以上を占めている。卒業後の進路状況は、2006（平成18）年3月卒業の生徒の場合、卒業生50名のうち、19名（38%）が進学、15名（30%）が就職、2名（4%）が家事・自営、14名（28%）がその他となっている（以上、同校平成18年度学校要覧等参照）。

・教育実践の特徴

校訓『志あれば必ず成る』のもと、美瑛高等学校では特色ある教育実践を行っている。

特にボランティア活動に力を入れており、町の美化活動に生徒・教職員が参加したり、自分達の通学マラソン大会にボランティアスタッフあるいはランナーとして参加したりするなど、奉仕の精神を養いながら自分達の地域に根ざした高校を目指した活動が行われている。

2. 美瑛高校「美高フォーラム」の再編

このパートでは、第一に美瑛高校において実践されている「美高フォーラム」がどのような曲折を経て再編されたのかを、そして第二に「美高フォーラム（ないしは《四者》学校づくり委員会）」が向後どのように再編されようとしているのかを、それぞれ整理する。

(1) 「美高フォーラム」再編の経緯

表のように整理した場合、美瑛高校において現在の四者間での協議形式——《四者》学校づくり委員会の設置——がとられるまでに、いくつかの段階を経ていることが確認できる。ここでは、その段階を協議体の機能あるいは目的に着目することで、大きく三つの時期に区分して検討してみたい。

第一期のフォーラムは、「生徒の生活環境改善の場」として位置づけられたものであった。生徒執行部がすすめてきた議論や、「三者懇談会(「美高フォーラム」の前身)」の中で中心的に取りあげられた議題は、学校祭における花火・行灯行列の復活や、登校時間の「正常化」であった(波岡知朗『『美高フォーラム』で変わる私たち』太田政男ほか『高校教育改革に挑む—地域と歩む学校づくりと教育実践』、ふきのとう書房、2004年、および2005年度調査を参照)。こうしたことから、草創期にあたる第一期には、メインのテーマとして生徒の生活環境をいかに向上・改善していくかといったことが据えられてきたことがわかる。

次いで第二期には、フォーラムは「学校と地域との関係改善の場」としての機能を強く帯び始める。このように地域とのつながりが主たるテーマとされた理由の1つに、美瑛高校が統廃合の対象になりかねないという危機感があったことは否めない。その意味でフォーラムは、学校を支えてくれる存在としての「地域」にアプローチする手段と捉えることができる。しかしながら、「美高フォーラム」への参加アクターに「地域」が加わることには、単なる学校の応援団を地域の中に増やす側面に加えて、生徒たちが地域の中で活動する契機——町の行事であるヘルシーマラソンへの参加や、地域の花壇プランターの整備など——を提供する側面もあった。換言するならば、こうした生徒たちの積極的な地域への参加は、町の住民の高校への信頼感を増加させる効果があると同時に、生徒たちが活動の中で地域の人びとから認められることによる自己の有用感や肯定感の向上にもつながる面を持っていることが確認できるのである。

このように、美瑛高校と地域とは、ここ数年の間で徐々につながりを深める方向にある。中でも、2005年からは美瑛町町長が「美高フォーラム」にパネリストとして参加し始めたことはその象徴であろう。そうした地域とのつながりの深まりを経て、「美高フォーラム」は次のステップへと移行し始めていった。

そして「美高フォーラム」は第三期へと入り、さらなる再編を経ながら「学校を共同で改善していく場」の機能を担っていく。第三期の特徴としては、以下の二つの点が指摘できる。第一の特徴は、2006年からフォーラムの場が四者間で学校づくりの構想を共同で

進めようとしていること、——「要求型」から「提案型」へとその性格が変わったこと——に見出せる。そして第二には、「《四者》学校づくり委員会」が設置されることで、協議体としての位置がより明確なものとなったこと——「四者が持ち帰りそれぞれの機関会議等で話し合い、これまでのような『話し合いっぱなし』という状況を打破」しようとしていること（波岡知朗、2006 合同教育研究全道集会レポート「感じたら語り出そう～美瑛高校《四者》学校づくり委員会のとりくみ～」）——に見出せる（《四者》学校づくり委員会）のシステムについての詳細は後述）。これらのことはいずれも、「美高フォーラム」さらには「美瑛高校《四者》学校づくり委員会」が、学校を構成するものとして四者間を位置づけ、さらにその四者が相互に影響しあいながら学校改善を実現していこうとする場になりつつあることを示唆している。

そこで次は主に「美瑛高校《四者》学校づくり委員会」に着目し、今後どのように「美高フォーラム」が再編されようとしているのか、その具体的な構想プランを整理してみたい。

（2）「美高フォーラム」再編のプラン

以上のように「美高フォーラム」が経てきたステップを三つに区分して概観してみた。ここではその中でも第三期以降——2006 年度に「美瑛高校《四者》学校づくり委員会」が新たに設置された時期——に焦点を当て、現在そして今後どのように討議空間が再編されようとしているのかを取り上げる。

そもそも第三期にはいって「《四者》学校づくり委員会」が設置されたこと背景には、教師側の「現在の形のままでは学校づくりに直結したものとはならず、参加者も頭打ちになるであろう」という課題意識があった。そうした課題意識を受ける形で、フォーラムを「しっかりと位置づけを行い、より意義のあるもの」へと再編していくことが構想された。こうした構想は 2006 年 4 月に生徒指導部から職員会議にたいして提案され、おおむね了承されるはこびとなった。

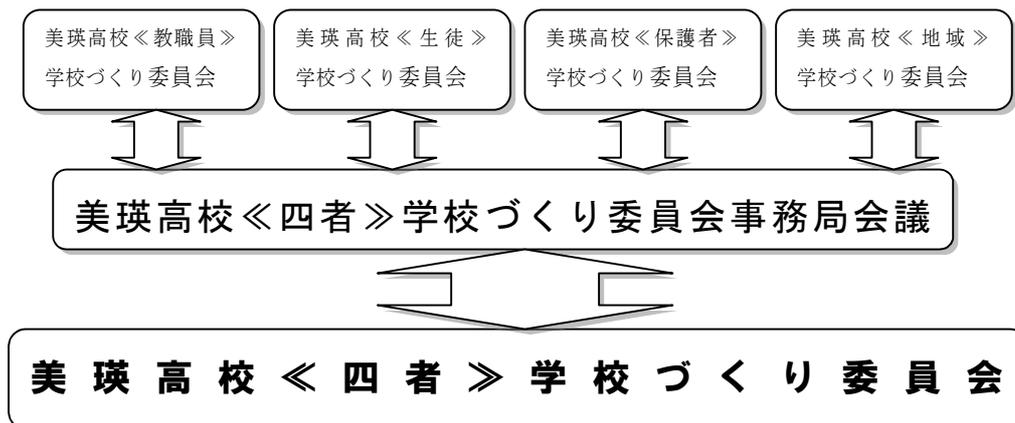
◆美高フォーラムの再編と「美瑛高校《四者》学校づくり委員会」構想

その再編プランは以下の四つの柱によって構成されている。第一の再編の柱は従来年二回実施してきた「美高フォーラム」を再編し、一学期に実施してきた「美高フォーラム」を「協議体」として改編することであった。そしてその協議体としての事務局機能を強化するために、四者（生徒・教職員・保護者・地域）の担当者によって構成される、四種類の「学校づくり委員会」が設置されることとなった（図参照）。第二の柱として、二学期の「美高フォーラム」を総合的な学習の一環で実施することで、全校生徒を参加させることが示された。第三に、新たに年度末にも「《四者》学校づくり委員会」を開催し、年度の総括をするとともに、次年度の方針を話し合う場としての機能を担わせることが提示された。そして最後の点として、各「学校づくり委員会」と四者が合同して討議する「《四者》学校づくり委員会」との関係が示されている。それは、構想の中で「事務局でテーマなどを決めて各委員会におろし、そこで話し合い、結果を事務局で集約する」こととし、さらには「《四者》（合同）委員会で話し合った結果を事務局で整理し、各委員会で話し合う」と書かれている。すなわち、個別委員会と合同が重層的な関係をなしているスタイルがとられることとなった。

これらの再編を通じて、第三期以降の体制がスタートする。この再編プランの中で描か

れた四者の関係は、①四者が一旦それぞれ個別の委員会の中で議論し議題を具体化し、②その後四者が一同に会して、各々の委員会から出された提案を持ち寄って討議し、③そして再度合同で話し合われた内容を個別の委員会あるいは機関会議に持ち帰り検討する、というものであった。

【図】美瑛高校《四者》学校づくり委員会の構成



(波岡知朗、2006 合同教育研究全道集会レポート「感じたら語り出そう～美瑛高校《四者》学校づくり委員会のとりくみ～」より、一部加工)

なお、この構想は既に 2006 年度に入り具体化されており、第三期の「学校を共同で改善していく場」としての性質を強く規定するものとなっている。

これまで見たような構想の下で再編され、第三期を迎えた「美高フォーラム」ならびに「美瑛高校《四者》学校づくり委員会」に着目し、以下、具体的にどのような形で実施・運営されているのかをレポートする。

3. 2006 年度「美高フォーラム」の実施状況

(1) 第 7 回美高フォーラム兼第 1 回美瑛高校《四者》学校づくり委員会を観察して

①協議の流れ

2006 年 6 月 22 日に第 7 回「美高フォーラム」が実施された。前に述べたように今回のフォーラムは第 7 回美高フォーラムとしての側面と第 1 回美瑛高校四者学校づくり委員会としての側面を持っている。しかし名前は違っても、両方に「よりよい学校づくりをすすめるために、生徒、保護者、教員、地域住民が率直な意見交換を行うこと」という共通の目的が存在している。そのため前回同様以下、便宜的に「フォーラム」と呼ぶことにする。以下、当日のフォーラムの状況をまとめたい。

フォーラムは 18 時に開始された。場所は体育館で、配置正面に司会（保護者、生徒、教師から各一人ずつ）を置き、司会に向かって右側に保護者と「地域委員」を含めた地域住民、左側に生徒席、向かい側に教職員と地域住民の一部が座るという構成になっていた。生徒、保護者、教職員、地域住民がそれぞれ約 15 名、それに私たちを加えた計 60 名でフォーラムは行われた。

高校三者協議会実践の意義と可能性（その2）

始めに開会式が行われた。まず校長、PTA 会長、生徒会長がそれぞれの立場での挨拶をもって開会の挨拶とし、その後、今回のフォーラムの趣旨説明が行われた。前回までの分散会形式での「話し合いっぱなし」という反省を生かし、生徒、教職員、保護者、そして地域住民の四者がよりよい学校づくりのための「提案」を行い、それについて質疑応答し討議を深めるといふ、互いに支えあうことができるように今回は「提案型」を採ったという旨の事が述べられた。

そしていよいよ協議Ⅰに入っていく。協議Ⅰでは生徒から保護者、地域住民、教職員へと7つの提案が出された。それぞれの提案に対し協議が40分ほど行われ、10分間の休憩を挟み協議Ⅱへと移っていく。協議Ⅱでは協議Ⅰを受け保護者、教職員から他の三者への提案、そしてそれに基づく協議が行われた。40分の協議の後、司会によるそれまでの提案に関する協議を踏まえたまとめがなされ、校長、保護者、地域住民、生徒会長という四者の代表から「有意義な話し合いになったこと」や「これを契機に町全体で学校づくりを考えていく」といった講評や感想、決意表明が示され、今回のフォーラムは閉会した。

②協議Ⅰ及びⅡでの討議状況

本フォーラムでの提案事項は次の通りであった。

- 1：学祭で弁当を出して欲しい。（生徒⇒保護者）
- 2：生徒以外も行灯をつくってはどうか。（生徒⇒保護者）
- 3：もっと若者向けの店を増やして欲しい。（生徒⇒地域）
- 4：街灯を増やして欲しい。（生徒⇒地域）
- 5：4時車を2両にして欲しい。（生徒⇒地域）
- 6：売店を改善して欲しい。（生徒⇒教職員）
- 7：自動販売機をつけて欲しい。（生徒⇒教職員）
- 8：学校は一体何をすると考えているのか聞きたい。（保護者⇒生徒）
- 9：美瑛高校（あるいは美瑛高生）をどう見ているのか聞きたい。（保護者⇒地域）
- 10：トイレや廊下、空き教室など電気や水道の節約意識を。（教職員⇒生徒）
- 11：どうすればもっと学校に足を運んでもらえるのか。子育て講演会や交流会などを実施するのはどうか。（教職員⇒保護者）
- 12：充実した学校生活を送ってもらうために、独自の奨学金制度をつくることはできないか。また進学を支援する奨学金制度をつくることはできないか。（教職員⇒地域）

既に述べたが、今回のフォーラムでは「提案型」という形が採られている。生徒、保護者、教職員から他の三者への提案が出され、それに基づく協議が行われた。上記はそれらの提案の詳細である。まず1から5までの生徒から保護者、地域に向けて出された提案から意見交換が始まった。1の弁当や2の行灯については予算や設備の面で2、3の質問が出たものの保護者の側もその考えに興味を示したようで賛成の意見が多く見受けられた。

3、4、5の地域に向けて出された提案についての討論は活発であった。3の提案については、生徒たちの要望の一方、町の既存の店の利用をしてもらいたい地域住民の「町の商店をもっと利用してはどうか」という声や、生徒自身の中から「この町に遊びに来ているのではないのでそうした要望は問題だ」という声が出された。4の街灯設置の提案は生徒の切実な願いが込められていた。変質者が出ているという報告も出され、下校に不安があ

るという意見が多数を占めた。地域委員の町内会長や町職員はその辺りはわかっているが、予算は町内会が負担せねばならず、住民の理解・協力を得る必要があるという回答がなされた。また提案5については、地域委員であるJR駅長は財政的に増車が難しいこととマナーの問題を説明したが、生徒の中には車両を増やしてくれるならマナーがよくなるような発言を出す者も見られた一方、別の生徒からは、それは違うのではないかという発言も出された。マナー改善をきちんとする必要があるということは一定了解されたように思われる。実際に若者向けの店を増やし、街灯の設置、車両を増設することは簡単に決められないが、それでも現実的に無理だと投げ出さず、地域住民の中から役場やJRの上部に掛け合ってみるという前向きな意見が出された。

次に6、7については生徒から教職員へ2つの学校内の設備改善に関する提案が出された。売店にかんしては売っている「食品の質」と「営業時間」についての見直しの2点が論点とされた。生徒側からの賞味期限ギリギリのパンの話で会場に笑いが起こることもあったが、その中でも教職員側は意見を真摯に受け取っているように思えた。校長からは「以前、売店が一度なくなっているため比較的自由にやらせている」ことが述べられたが「再度売店側と協議する」ことが約束された。

後者の自動販売機については、街灯や汽車同様、予算とマナーが問題となった。売店閉店後など時間に左右されず飲み物が買いたいという理由だが、その分維持費がかかる。提案7に限らず言える事だが、提案によってはお互いがお互いの言い分を理解しながらも良い解決策が見出せないといった場面がしばしば見られた。

後半の協議Ⅱは時間の大半を提案8、9及びそれに付随する討論に費やした。保護者であれば当然気にかかる点であろう提案8や、ともに学校づくりを進めていく上でお互いが学校、そしてそこに通う生徒、もしくはわが子に抱くイメージを共有するという提案9は欠かすことのできないものである。本音で語られ、活発化した討論の状況を見る限りにおいては、イメージの共有、そしてお互いがどう考えているかを知るという点で成功と言えるだろう、という印象を受けた。

③考察

「話し合いっぱなし」になってしまうという前回の分散会方式の反省点を踏まえて、今回は課題を速やかに改善できるように四者それぞれが具体的な提案をし、その場で改善策や今後の方向を見出そうとする方式を採用した。これによってフォーラムはより実効的なものになったと評価できる。他方では、提案が多く、またすぐに解決策が見つからない課題もあって、スピーディな進行が行われた分、ゆっくり考えきれないもどかしさも筆者には少し感じられた。少ない時間の中で、課題解決のための論議を前進させていくことと、みんながしっかりと考えることをうまく両立させていくことは非常に難しい。

しかし、短い時間ながらも、生徒たち自身が今までと異なる、新しいことを成すときには様々な制約が付きまとうこと、望むだけでなく自分たち自身も変わっていかなければならないことを学習していると筆者には実感できた。はじめはただ要求するだけ、叶えてくれるなら自分たちもマナーを正すという態度だった生徒たちも、「じゃあ、何をしなければならないのか」と今までの自分たちの生活・行動・態度に結び付けて捉えられるようになったのは、確かな「成長」と言えるのではないだろうか。また、生徒たちの現実に即した要求に対して他の三者が真摯に受け止める姿勢で討議していた点に、ある種の対等な構

会員による討議空間の一面が見えたように思われた。地域委員の人々が生徒の提案を受け、上層部に提案してみるなどと回答していたことや、売店問題で校長が生徒と正面から向き合っている姿が印象に残った。

これらの点は次回のフォーラムだけでなく、学校づくりそのものに繋がっていくだろう。そして、将来に活かしていくために常日頃からの話し合いを続け、今の関係をより良いものにしていく努力がさらに重要になってくるに違いない。

（2）第8回美高フォーラム観察記録

第8回美高フォーラム（生徒・保護者・教職員・地域でつくる四者懇談会）は、2006年11月19日に開催された。以下は、このフォーラムについての簡単な参与観察記録である。

①準備過程

このフォーラムの開催に当たって、次のような準備過程があった。以下、「美瑛高校《四者》学校づくり委員会事務局会議報告」②⑤、2006年10月、11月による。

まず、数回の「美瑛高校《四者》学校づくり委員会事務局会議」が、保護者、教職員、生徒参加を得て開催されている。ここでフォーラムの目的、テーマ、日程、内容（パネルディスカッションや分科会のテーマ）など、今回のフォーラムのプログラムについて討議され、原案が作成された。目的や内容の部分では、いかに「やわらかい」雰囲気を出すかといったことや、参加者が発言しやすいグループの作り方、参加の呼びかけ、分科会テーマの検討などが討議されている。この事務局会議の参加者は、それぞれ数名の三者の代表たちであり、四者のもう1つの構成員である地域委員は参加が見られない。

これと並行する形で、「《生徒》学校づくり委員会」、「《保護者》学校づくり委員会」、「《教職員》学校づくり委員会」がそれぞれ数回、開催されている。いずれもレポート作成者、司会・記録等の役割分担や参加者集約などの準備と確認が行われている。

他に生徒にかかわっては、フォーラムの数日前に通常および特設のロングホームルーム、それに後期生徒総会がもたれ、このフォーラムの開催について周知、討議が図られている。

②第8回美高フォーラムの実施内容

第8回美高フォーラムは、10時20分、演劇部公演によって始まり、学校行事スライド紹介、吹奏楽局演奏とアトラクションが引き続いた。11時より開会式が行われ、校長、PTA会長、生徒会会長の挨拶と司会の日程説明があった。この後、11時30分より分科会、昼食休憩をはさんで、13時よりパネルディスカッション、14時に閉会式という流れで進行し、14時30分に終了した。参加者は、生徒と教職員は全員であり、保護者と地域住民はともに十数名程度であった。

ア、分科会

分科会は5つのテーマをそれぞれ2グループに分け、合計10会場でそれぞれに四者が参加して実施された。5つのテーマとは、①いじめ・命の問題、②はたらくとは・・・、③高校生のマナー、④勉強って何、⑤美瑛高校の良い所悪い所、である。分科会の進め方は、司会者の開会宣言、参加者自己紹介、報告者「意見発表」、話し合い、司会者のまとめと閉会宣言、といった手順になっており、1時間が費やされる。

筆者が参加した「②はたらくとは…」という分科会では、生徒と養護教諭各1名が司会を務め、2年生の女子生徒が「意見発表」を行った。「意見発表」は、人はやりたいこと

をやるために働くのだらうと思うが、まだ自分の適正もよく分からず、進路をどうしたらよいか、みなさんから意見をもらっているいろいろと考えたいという内容であった。討議は、進路が決まった3年生や地域住民、教師が中心になって進み、何のために働くのかというテーマをめぐって、金のためという考え方でよいのか、他に働き甲斐や自分の向き不向きもある、社会はさまざまな職業があって成り立っているという考え方が大事ではないか、などという意見が交わされた。発言者がやや偏っている傾向はあったが、参加者、とりわけ生徒たちにとっては働く意味について考えるよい機会になっていると感じられた。

イ、パネルディスカッション

午後のパネルディスカッションは、美瑛町町長、同窓会長、PTA会長、校長、前期生徒会長、後期生徒会長（現会長）の6名をパネラーにし、教員1名が司会となって実施された。テーマは、「地域に根ざした学校づくり」である。

最初に、司会から学校統廃合が全道的に課題となる中で美瑛高校の存続をどう図っているのが本校とこのディスカッションの課題であるとの趣旨説明があった。次いで、各パネラーが1人5分ずつ発言を行い、フロアを含んで全体討議が10分程度、最後に各パネラーのまとめの発言各3分ずつあって終了となった。

美瑛町長は、国内で同様に美しい町づくりを進めている自治体と美瑛町は「日本で最も美しい村連合」を結成しており、また世界にある同様の組織とも連携していこうとしていることを話し、町内にあるダム湖をもっときれいにする計画を立てているのでぜひ協力してほしいと生徒たちに呼びかけた。

校長は、人は受験的な学力だけでなく、もっと広い人間的な力が大切であり、そうした力を身につけることができる学校が美瑛高校であるので、ぜひ自信をもって進んでもらいたいという旨の発言をした。同窓会長、PTA会長ともに生徒たちへの期待を述べ、前・現生徒会長たちは美瑛高校をよい学校にしていきたい旨の発言をした。

全体討議では、ある生徒からマクドナルドを美瑛町に作ればもっと若い人が来るのではないかとの発言があった。これに対しては否定的な声も聞こえたが、PTA会長は若い人たちに求められる町づくり、商店街づくりの必要性を感じるという回答を出した。また別の生徒からは、かつてあった農業科がどうしてなくなったのか、まちづくりに関わって駅前の大時計の建築は本当に必要だったのか、ある住民からは、どんな生徒にも分かる授業が必要ではないかという発言があったが、時間の関係で深い討議にはならなかった。

最後に各パネラーのまとめがあってパネルディスカッションは終了した。

ウ、閉会式

閉会式では、校長の講評、保護者2名と地域住民2名の感想、生徒2名の決意表明があった。

③考察

ア、新しい形式

第7回美高フォーラムが、四者による協議会方式であり、生徒参加も生徒会を中心とする一部にとどめたのに対し、第8回フォーラムは生徒・教職員は全員参加とするまさにフォーラム形式をとったことが特徴であった。しかも、通常フォーラム形式は多数の参加者を観客としてしまいがちに終るが、今回は全員が発言できる分科会と誰でもが全員の前で発言できるパネルディスカッションの2つを組み合わせることによって、参加者に単なる

観客で終らないような工夫が凝らされていたといえる。

イ、分科会

三者協議会では、深い議論が行われることがあってもそれは生徒会を中心とする一部の生徒に参加者がとどまる傾向があるが、今回のフォーラムは分科会でいまの高校生にとって大事な、またときには重たいテーマを据えることで参加者全員に実質的な討議への参加の機会を保障したものととらえることができる。こうしたテーマに関する討議は授業でもできるものではあるが、通常の授業という空間を離れ、保護者や地域住民、それに筆者たちのような外部者が参加する開かれた場で行うことは、生徒たちにとって教師生徒関係のもとでの教えられる存在という固定的な位置から脱し、一人の市民として遇され、また自らをそうしたものとして意識する機会を意味し、非常に重要なものといえる。

筆者が参加した分科会の討議では、実際、複数の生徒が自分の進路の決め方や仕事の選び方、働く意味について率直な発言を出しており、大人の参加者とある意味対等な対話ができていると思われる。また「意見発表」を行った生徒は、最後のまとめに際して、いろいろな人の考えが聞けてよかったと述べていた。

こうした開かれた空間であることを評価した上で、なお筆者には大人・教職員と子ども・生徒の間の討議の難しさも感じずにはいられなかった。生徒の未熟な言葉には、どうしてもその背後にある考えの不十分さを指摘する発言が大人側から出てしまうものである。働くとは何かという問いは、大人にとっても悩まずにはいられないものである。答えのない問いを、大人が平場に降りて、生徒のいまをうまく聞きだしながら、また自分のありようをうまく出しながら、ともに考え合うような場を作ることは生易しいことではない。今回の討議経験が次の討議に活かされ、美瑛高校に討議経験が蓄積されていくことを期待したい。

ウ、パネルディスカッション

次にパネルディスカッションについては、生徒教職員の全員参加で実施したことは、同校の生徒たち全員が学校づくりの当事者としての意識をもつことにつながるものといえ、非常に有意義であったと思われる。また昨年に続いて町長がパネラーに参加し、まちづくりへの協力を訴えたことも、生徒たちを市民として遇し、彼らの存在を一個の主体としてとらえていることと見ることができる。PTA 会長が、マクドナルドを求める生徒の声を即座に否定せず、まちづくりのための1つのアイデアとしてとらえたことも、同様にみることができよう。このようにパネルディスカッションも分科会と同様、あくまでも全員参加の学校行事の一環ではありながらも、生徒を開かれた場に引き出し、対等な対話の相手として遇し、自らそうした存在として意識する機会となっているのである。

パネルディスカッションの討議からいくつか感じたことを付け加えたい。

1つは世代間ギャップの大きさである。たとえば、まだ高校進学率の低い時代を過ごしたいまの高齢者世代にとっては高校での学習機会は得がたく、貴重なものであったと思われるが、ほとんどの子供たちが高校に進学し、しかも成績による輪切りで消極的に高校選択を強いられている今日の高校生たちとは、高校教育のとらえ方が大きくことなっているであろう。実際に、一部の参加者からは「たいへんな競争を勝ち抜いてきたみなさんは高校での勉学の機会を大切にしたい」というようなことが述べられていたが、これは大人側の善意であり、生徒たちへのエールであるとしても、生徒たちはこの言葉をどう受

け止めているであろうか。

次に、生徒の学力のとらえ方である。生徒の学力を低いものとして否定的に見る発言が散見された。同様の言葉は、過去に私たちが観察した美高フォーラムでも見られた。これは確かに生徒たちの実態をとらえたものであり、生徒たちの現状を包み隠さずに討議することも大事なことである。しかし、それをいついかなる形で言うかは慎重でなければならない。筆者には、比較的不用意な形で(たとえば、「学力は低くても人間的な力があれば・・・」や、「東大に行けるわけじゃないんだから・・・」といった言い方で)、生徒の学力に触れられていたように感じられた。現実社会が能力主義社会、学歴社会であり、またそうでなくても一人の人間として自分の能力のありように真剣に向き合うことが求められるが、これは本当に学ぶべきことは何なのか、また社会においてどう生きるかという大きな問いと不可分な問題である。ここにも生徒たちと一部の大人たちの間の意識のギャップがかいま見えたように思われた。

第3に、高校、生徒、地域の関係である。今回のフォーラムは「地域に根ざした学校づくり」をテーマに掲げ、高校の存廃問題を突破する学校づくりを目指そうとするものだった。学校存廃問題と学校づくりを結び付けていくことは、生徒に自分自身を学校の現在と未来の当事者、主体者として意識させ、また同時に学校づくりに地域を巻き込むことも可能にする優れた取り組みであると思う。自分の在籍している高校の存廃問題を論じることは生徒の意見表明権の行使であり、同時に彼らの成長につながるものである。また町長がこのフォーラムに参加していることは、美瑛高校と地域の関係の1つの発展を示している。

しかし、生徒たちの高校生活は統廃合を防ぐためという観点だけから組織化されてはならないのはいうまでもない。生徒たちのいまの高校生活を充実したものにし、彼らの将来を見出すことが教育実践と学校経営の中心におかれなければならない。こうしたテーマでフォーラムを開催する場合、地域住民がもっと多く参加してくれれば、生徒たちは勇気づけられるであろうし、存続問題を自分たちの責任として押し付けられかねない現状と感覚から脱し、自分の将来を見出すことと学校の未来を相対化しつつ、重ね合わせるができるのではないだろうか。地域では美瑛高校が統廃合に巻き込まれないよう存続運動が行われていると聞くが、せっかくのこうしたフォーラムにわずかな町民しか参加していないことは、高校と地域の関係に依然としてギャップが存在していることをうかがわせる。町長も参加し、地域が運動を行っている高校存続問題に関するフォーラムであれば、高校存続問題と高校・高校生の現実の姿を広く町民のものとするのが可能であったのではないかと感じる。

4. まとめ——「美高フォーラム」の発展をどう見るか？

これまで見てきたような「美高フォーラム」の実践の発展をどのように評価することができるのだろうか。ここではさしあたり、以下の3つの観点から、「美高フォーラム」の発展を整理・検討していきたい。

(1) 柔軟な発展

1つ目の観点は「美高フォーラム」のきわめて柔軟な発展のしかたについてである。先のパートで「美高フォーラム」が設置目的・機能別に見た場合、5年間を大きく三つの時期に区分できることを示したが、それは「美高フォーラム」が特定のモデルにとどまるこ

となく、柔軟に発展して来たことを意味している。このように「美高フォーラム」が柔軟に発展していった背景の一つには、2006年まで事務局を持たず、いわば手探り・手作りでフォーラムを企画・運営してきたことに起因しているものと思われる。結果的にこのことが、「美高フォーラム」の変革を機動性のあるものにし、工夫や反省点がその時々で反映することを可能にしていた。

しかしながら、事務局が存在していないことは、フォーラムの位置づけや役割を明確なものとする上で、時として組織運営上の課題となる。そのため2006年度には、「美高フォーラム」を担当する「《四者》学校づくり委員会」事務局が設置された。それゆえ今後はこれまでの到達点を踏まえながら、四者間の合意の下でフォーラム等が企画・運営されることになった。その結果、「美高フォーラム」ならびに「《四者》学校づくり委員会」の位置づけが明確化された。

フォーラムの位置づけをより明確化し強固なものにしていくための一つの方途として、今後四者間の合意の下で規約・宣言・憲章のような形で位置づけや役割を文章で共有化していくことが考えられる。こうした規約の制定は長野県の辰野高校、白老東高校、札幌平岸高校などの取り組みにも見られるが、四者間の合意の下で美瑛高校のオリジナルの規約を作ることで、「美高フォーラム」設立の理念が、生徒・教職員・保護者・地域住民といった「空間的」にも、人の入れ替わりを越えた「時間的」にも共有化されることにつながるであろう。そうすることが、今後の安定的・継続的な討議空間の実現と保障をより確かなものにする契機となるかもしれない。

（2）運営形態の発展と討議スタイルの変遷

そこで次の観点として、運営形態の発展について着目する。先に見たように、これまでは「美高フォーラム」にかかわる専属の事務局は存在していなかったが、2006度からはあらたに「美瑛高校《四者》学校づくり委員会」とその事務局が設置された。その新体制はユニークなものとなっている。それは、まず生徒・教職員・保護者・地域からのメンバーによって各「学校づくり委員会」が構成され、次にその各「学校づくり委員会」から合同の「《四者》学校づくり委員会」の事務局にスタッフを送り出すというものであった。

このように地域や保護者の代表者も含めて個々の委員会を設置することで、各委員会の中で事前（さらには事後）の話し合いをもつことができ、フォーラム当日に単にイベント的に意見を出し合う形態ではない一段高いレベルの討議が可能になるようとしている。また、事務局メンバーを四者合同で構成することにより、事務運営の主体が特定のアクターに偏らないように配慮している点も重要であろう。というのも、四者それぞれが一定程度の自立性を保持しながら討議空間に参加していくことが可能になっており、各アクターの位置づけ、役割分担がより自覚的なものになることが今後期待されるためである。

そして運営形態の発展と同時に、討議スタイル自体の変遷についても着目する必要がある。特に、小グループの分散会(分科会)とパネルディスカッション、そして全校生徒・教職員の参加を実施したことは、討議に参加するために必要な「語る力」と「聞く力」の両方を育む上で有効であろう。たとえば、小グループの分散会が設定されることで、従来の討議にありがちな「発言しない参加者」を生み出す割合を小さなものにしていく。また、パネルディスカッションについては、他の大人たちがどのように討議するのかを生で見たことのない生徒たちにとっては、各所属の代表者たちの討議を一定程度相対的な位置に身

をおきつつ(もともと、パネルディスカッションの後半には主体的に参加するチャンネルが開かれているが)聞く経験は、今後自分たちが討議に参加していく上で参考にできる有用な先行モデルとなろう。

(3) 「地域とのつながり」

そして第3の観点、美瑛高校の実践の中でも大きな特徴である「地域とのつながり」の発展・深化である。特に美瑛高校は早い段階から地域住民にたいして「美高フォーラム」への参加を積極的に呼びかけてきた。たとえば、一般の住民からは同窓会・振興後援会などの学校にゆかりのある人々が、さらには町長や商工会関係者もフォーラムに一部参加する段階に至っている。また、このように地域にたいして「美高フォーラム」への参加を呼びかけるだけでなく、逆に生徒たちがボランティア活動などを通じてこれまでになかった形で地域へと足を運ぶ動きも出来上がってきた。

ネットワークやパートナーシップを構築していくためには、相互性や互惠性のある関係性を築くことが重要になってくる。この「美高フォーラム」はそうした生徒・学校・地域間で相互に影響しあう関係が構築されようとしているのではないだろうか。生徒たちにとっては地域の中での活動を通じた自己肯定感の向上につながり、学校にとっては学校改善への地域の声の反映につながっていくであろう。しかしながらここで、地域にとってこうした実践がどのように作用しうるのか、が問題になる。

例えば、現在の美瑛高校の生徒たちには、地域事業にボランティアとして参加したり、過去に形成された美瑛高校にたいする「偏見」をなんとか払拭したい、という姿勢や意識を見ることが出来る。そうした生徒たちの姿勢や意識がリニアに地域住民たちの評価につながる事が理想ではあるが、実際には先にも触れたような「世代間ギャップ」や生徒にたいする理解の浅さなどが立ちはだかる。こうした障壁が、地域側の意識変容——生徒の実態の理解を理解すること——を難しいものとしていた。

また、一方で高校と地域の関係は新しい段階に到達したといえるが、しかし他方ではまだ美瑛高校のこの取り組みは町の中に十分な位置を占めていないようでもある。美瑛高校の存在と美高フォーラムが町づくりと町民の中により深く根づいた時に、高校と地域の関係は一段高く発展し、高校の新しい展望も開けてくる。その意味で、現在は高校よりも地域の側の動きが求められているように思われる。中でも高校存続は生徒たちにとって共有すべき課題ではあっても、押し付けられるべき責任ではないのである。

こうした課題は確かに存在しているものの、であればなおのこと四者それぞれが「美高フォーラム」などの討議空間の中で、相互に持っている「相手のイメージ」と、「自己の実態」を交換していくことが求められる。というのも、そうしたイメージと実態との齟齬を修正していく中で、相互理解の深まっていく契機が生じると考えられるからである。

(4) まとめ

以上概観してきた「美高フォーラム」の実践の特徴と意義をあらためて最後に整理すると、以下のようになる。

一つ目の意義として指摘できるのは、地域とのかかわりの中で討議空間を設定することの重要性が明確に示された点にある。これは特に美瑛高校が置かれている環境を考えた場合、学校を支えるアクターとして地域の存在が不可欠であろう。しかしながら、学校を支えるアクターとして地域が機能するためには、その前提として地域の学校に対する「理解」

高校三者協議会実践の意義と可能性（その2）

あるいは「信頼」が必要になる。より具体的に言えば、先にみたように地域住民の学校（あるいは生徒）にたいする認識の中には、必ずしも正鵠を射たものとは言えないものも見られた。そのような状況にあるなか、美瑛高校で実践されているフォーラム等の実践は、地域の学校にたいする理解や信頼を促進する上での、ひとつの有用なチャンネルとして機能する可能性を有しているといえる。

二つ目の意義は、そうした理解促進のための取り組みと同時に、「美高フォーラム」等での協議を学校改善に生かそうとする姿勢が全面に打ち出されている点に見ることができる。これは 2006 年度に新たに設置された「《四者》学校づくり委員会」の名称に示されているように、生徒・教職員・保護者に加え、地域を包含した四者による協議の場を創出することで、学校改善を共同して構想していく機能が期待されている。こうした四つのアクターたちが重層的な討議空間に臨席することは、それぞれにとってそれぞれ四者のおかれた位置を再認識することにつながるであろう。それぞれが自己のおかれている位置を再認識したときに、初めて自分たちができること、すべきこと、そして相手にしてあげられることが明らかになってくる。

以上のことから美瑛高校の実践は、自己理解・他者理解をつうじて四者間の信頼関係を構築していく契機を提供するものといえるだろう。そしてそうした関係性の構築を土台として、はじめて共同的な学校づくりの構想が可能となるものと思われる。美瑛高校の実践にはそうした可能性を見出すことができる。

終章 三者協議会実践の意義と可能性

以上、2校の三者協議会の取り組みから得られたまとめを整理して結論としたい。

まず、三者ないし四者が一堂に会する討議の継続的な積み重ねは、関係者間の信頼醸成や相互理解の深まりを生みだしていたと言える。富良野高校の PST 懇談会は取り組み自体まだ年月が浅いが、元々の地域と学校が抱える文化的土壌を支えに、三者が率直に意見を出し合える空気が整っていた。事前協議の充実や参加者の拡充に依然として課題があるものの、少なくとも参加する生徒、教員、親たちは互いの考えを知ることによる気づきに意味を見出している。三者それぞれが互いに関係を構築していけることについて、現在の富良野高校の当事者たち自身がその意義を実感できているのである。

美瑛高校においても同様のことが言える。これまでの生徒、教員、親という三者の相互理解の進展に加え、これまでに関係性が乏しかった学校と町が、美高フォーラムの実践を通じ次第に結びつき始めている。美瑛の実践ケースでは学校と町が抱える特殊な事情があり、参加する四者の当事者意識については、まだそれぞれで微妙なズレもないとは言えない。生徒たちに学校存続という深刻な課題への責任を対等に持たせていくことには、やはり慎重であるべきとも言える。しかし、全校規模での美高フォーラムの開催と、町や地域を積極的に巻き込む実践は始まったばかりである。参加者の多様化と規模の拡大を事前協議の充実化などで支えながら、当事者の相互理解をこれからも追求し、地域との共同的な学校づくりへの基盤がますます整備されていくことを期待したい。

最後に、2005 年度調査でも確認した三者協議会における生徒の教育的機能について、そして生徒の成長に留まらず教員や親の生徒理解や学習の重要性を含めて、三者協議会が有する共同的学习機能についての言及しておきたい。

リーダー研修会など生徒の自主自立の取り組みと重ね合わせる狙いが見えた富良野高校の PST 懇談会は、協議機関としての性格を求める声の一部にありながらも、その主な特質は生徒の学習と成長の機会としての意味づけにあった。2005 年度調査における白老東高校の三者協議会では、地域を加えた共同的な学校づくりの追求に時期尚早との判断があり、同様に生徒の教育の場としての意味づけを強める傾向が見られていた。そのため、この 2 校から、三者協議会の発展方向が当事者間で共有されにくい場合、その着地点として、討議による生徒への教育的機能を優先的に目的化する傾向が伺えたと言えよう。であるならば、三者協議会における生徒への教育的機能を更に高める目的で、日常的な教科教育や学校生活で目指される教育との関係性を問いなおしていくことが今後の課題とされていく。

一方、美瑛高校の「美高フォーラム」の取り組みは、町や地域との積極的な連携を見据え、共同的学校づくりを視野に入れた協議機関としての性格を強める傾向にあった。これは、先の 2 校とは相対化された取り組みであると言えるだろう。しかしその中でも、生徒の成長発達の場としての機能が無かったわけではない。討議全体を通じ生徒たちが話を聞いてもらえる安心感なども含め、学校内の閉ざされた関係性に留まらない、多様な地域住民との素朴な話し合いから生徒が受ける影響は決して小さくないはずである。

また、学校と町や地域の関係が遠かった過去と比べると、地域に開かれた「美高フォーラム」の取り組みは、教員や親たち、そして地域代表の参加者の距離をそれぞれ近づいてきたと言える。三者協議会という対話的相互理解の機会が、生徒たちに限らず大人たちの他者理解と自己理解の機能をも果たしてきているのである。地域も交えた討議実践は未だ発展途上であり、当事者間の相互理解が深まるには更なる時間が必要にも見える。しかし「美高フォーラム」の取り組みには、三者協議会における意思決定機能と共同的学习機能との統合的な枠組み形成に向けた確かな萌芽が確認できると言える。可能性の域であることに留保せねばならないが、美瑛高校の今後の柔軟かつ地道な取り組みを期待し、そこに三者協議会の新たな発展形態という展望を描きたいと思う。

全国的にもまだまだまばらな三者協議会の取り組みではあるが、その芽は多様な様相を見せながらも確実に成長していることを、2006 年度調査において改めて実感できた。特に北海道の事情を考慮する際、学校と地域との密な連携に基づく教育や子育ての推進、そして地域づくりや地域振興までも見据えた取り組みの中に、この三者協議会が有する大きな可能性が見出せる。私たちの 2 年にわたる調査報告が、その地道な取り組みの一助となることを期待したい。

[付記] 本調査の実施に当たって、序章の調査経過に掲げた皆様には快くインタビューやアンケートに応じていただき、また両校には三者協議会の視察と参加を認めていただいたことに、厚くお礼申し上げます。

※本調査は、2006 年度北海道大学大学院教育学研究科教育学部授業「教育行政調査実習」として実施したものである。調査には本報告書執筆者以外に、辻村貴洋（北海道大学大学院教育学研究科博士課程 3 年）、渡辺宏輝（同修士課程 2 年）、市原純、橋場典子（同修士課程 1 年）、角幡草太（同教育学部 4 年）、佐坂真由実、佐藤結実、豊沢淳子、長井 梓（同学部 3 年）、藤田春香（同学部研究生）、明田川知美（同学部卒業生）が参加した。

高校三者協議会実践の意義と可能性（その2）

表 美高フォーラムの変遷・再編

区分	年度	出来事	備考
第一期	2001	◎学校祭時の花火・行灯の中止。 ◎登校時間の前倒し	
	2002	前期 ◎生徒会執行部による交渉 ⇒球技大会での清涼飲料水販売を実施 ⇒学校祭の平日開催が撤回 花火・行灯の復活	
		後期 ◎「三者懇談会」開催 ⇒登校時間の回復	
	2003	前期 ◎第1回「美高フォーラム」開催 「三者懇談会」から「美高フォーラム」 に名称変更 テーマ「授業」	○生徒・教師・父母に加え，周辺住民も参加（以下同じ） ○美瑛・旭川で開催
後期 ◎第2回「美高フォーラム」開催 テーマ「美瑛高校をよくするには」		○美瑛・旭川で開催	
第二期	2004	前期 ◎第3回「美高フォーラム」開催 テーマ「学校生活」「制服」「アルバイト」等	○美瑛のみで開催 （以下同じ）
		後期 ◎第4回「美高フォーラム」開催 テーマ「これからの美瑛高校を考える」	○分散会討議形式を導入（以下同じ） ○同窓会・振興後援会からの参加
	2005	前期 ◎第5回「美高フォーラム」開催 テーマ「これからの美瑛高校を考える」	
		後期 ◎第6回「美高フォーラム」 テーマ「どうする美瑛高校!？」	○ハ゜ネットディスカッション導入 （ハ゜初対として町長，商工会事務局長も参加）
第三期	2006	前期 ◎第7回「美高フォーラム」（兼：第1回美瑛高校<<四者>>学校づくり委員会） テーマ「生徒・教師・保護者から相互への10項目の提案」 （街灯をふやしてほしい，など）	○「要求型」から「提案型」へ （各々の機関会議で審議へ）
		後期 ◎第8回「美高フォーラム」 テーマ「いじめ・命の問題」，「はたらくとは・・・」，「高校生のマナー」ほか	○2学期の美高フォーラムは生徒・教職員の全員参加に

【参考文献】波岡知朗『「美高フォーラム」で変わる私たち』，太田政男ほか『高校教育改革に挑む一地域と歩む学校づくりと教育実践』，ふきのとう書房，2004

横井敏郎ほか「高校三者協議会の意義と可能性—北海道の2つの高校の事例調査を通じて—」，『公教育システム研究（第5号）』，2005